

(三) 英賀御堂あがみどう
(英賀御坊ごぼう)

英賀御堂 十五世紀の末、本願寺宗主そうしゆの蓮如上人れんによしょうにんというえらい坊さんが播磨じょうどに浄土真宗じんしんしゅうを広めるのによいところはないかとさがし、交通の便のよい英賀の城下町を布教の中心地にしました。また、代々の城主一族も信仰心しんこうが厚く、

布教の仕事を助けました。浄土真宗では播磨で最古の寺である播磨六坊が、英賀とその周辺に建ちました。次いで城下に、大寺院の英賀御堂（本徳寺）をはじめ、多くの寺が建てられて栄えました。こうして浄土真宗は英賀を中心として、その周辺に広がりました。この真宗教団を英賀門徒、あるいは英賀衆といいました。

一五七〇年（元亀元年）、今の大阪城のところにあつた石山本願寺が信長と戦ったとき、本願寺宗主の顕如上人が全国に呼びかけて、本願寺のために兵を募りました。この呼びかけに英賀城主三木通秋は、兵を送り、本願寺に味方をして信長と戦いました。このように、英賀は城下町、あるいは門前町、さらに海上交通の要地として栄えたのです。

英賀落城の後、秀吉の命令によって、英賀御堂は亀山に移りました。御堂に次いで数多くの寺も、それぞれ他の土地に移されていきました。六坊のうち城

下にあった三か寺は法専坊ほうせんぼうが東延末ひがしのぶすえへ、残りの二か寺は龍野たつのに、また有名な四か道場の興宗寺こうしゅうじは苦編とまみに、妙善寺みょうぜんじは加茂かもに、光照寺こうしょうじは二つに分かれて龜山と飾磨の天神さいとくじに、西徳寺さいとくじは都倉とくらへと移りました。浄福寺じょうふくじ・真行寺しんぎょうじ・光養寺こうようじ・正龍寺りゅうじ・法性寺ほつしょうじなども英賀から龜山に移ってきた寺です。現在は明蓮寺みょうれんじだけが英賀に残っています。

一六〇二年けいちよう（慶長七年）、京都の本願寺が東西兩派はに分かれましたが、龜山に移った御堂は龜山本徳寺となり、最初は東本願寺に属していましたが、しかし、池田輝政のころ本徳寺と本山ほんざんの教如上人きょうじょうにょとの対立から西本願寺派になり、領内の末寺まつじもみなこれになりました。後に、本多忠政ほんだただまさが地内町じないちやうに東本願寺派の船場本徳寺を建立こんりゆうしたので、ここに、領内の浄土真宗も東西兩本願寺派に分かれました。

龜山本徳寺の建物の大部分と親鸞しんらん聖人しょうにん絵伝えでん、またかつて英賀御堂にあった

つり鐘などは、市指定の文化財となっています。